

introduction

整形外科医が診察する患者の主訴のほとんどすべては「痛み」です。近年、各種鎮痛薬や理学療法などの進歩により、保存治療の選択肢は各段に広がりましたが、それらに抵抗性の場合、症状を裏付ける形態学的異常があれば、整形外科医としては手術治療を検討することになるかと思います。しかし、画像所見が乏しくて手術に踏み切れない場合や、確信をもって手術をしたにもかかわらず肝心の患者の痛みが取れなかったという経験もあるのではないのでしょうか。保存治療の引き出しがもっと増えれば、手詰まりかと思われていた難治の痛みや、あるいは術後も残る痛みにも対応できるかもしれません。その引き出しの1つとして私は東洋医学というものを選びました。東洋医学の人体や疾患に関する考え方は、私たちが教育されてきた西洋医学とはまるで異なるように見えますが、勉強していくと、表現の仕方が違うだけで互いが実は同じことを言っていることも多いことに気がきます。目的は一緒なのです。1つの疾患、1人の患者を多面的に診ていくことは大変有用なことだと思います。本号を通して、ご自身の診療の幅が大きく広がっていくことが実感できることと思います。東洋医学に含まれるものとしては、漢方薬、鍼灸、按摩などがありますが、本号では漢方薬による治療に絞って解説しています。漢方薬の運用において、東洋医学的な概念を最小限知っておくことは大変有用で、私たちが普段行っている西洋医学的治療への組み入れもやりやすくなります。よって、東洋医学の総論について省略することはしませんでした。一方で、東洋医学的な診方に依らずとも漢方薬を上手く運用するための、新しい考え方やコツについても解説しています。漢方薬とは現代科学の視点でみればどのような薬なのか、という点についても触れました。漢方薬への理解が深まることと思います。また、西洋医学にはない「冷え」の考え方、女性特有の痛み、メンタルの視点からの痛みの診方、難治性疼痛への対応など、「痛み」の治療を行う整形外科以外の先生による漢方診療の実際についても解説をお願いしました。痛み治療の視野がさらに広がることと思います。本号で執筆を依頼した先生方は、すべて私自身が漢方診療を勉強するうえで著書、論文、学会発表、講演、セミナーを拝聴、拝読させていただいた先輩方ばかりです。特に、井齋偉矢先生は私が直接診療に陪席し、教えを請うたいわば師匠です。ですから、本来なら私はこのような序文を書ける立場にはないヒヨコ子なのですが、そのような者の執筆依頼を快く引き受けていただいた諸先生方には感謝してもしきれません。この場を借りて、改めて深謝申し上げます。読者の皆様方におかれましては、エキスパートのエッセンスを存分に吸収し、明日からの診療に少しでも役立てられたなら、これに勝る喜びはありません。

やなぎ整形外科・漢方クリニック
柳澤道朗